

アスリートの肖像

文／中島亮
撮影／中西祐介
コーディネート／アフロ

Fly for it!
— 一緒に、もっと飛べる —



優美な
スタイルを
貫く

スポーツクライミング

白石阿島

撮影協力／B・P・U・M・P TOKYO 秋葉原店

両

親は日本人だが、ニューヨークで生まれ、ニューヨークで育った。クライミングとの出会いは6歳の時。セントラルパークで自然の岩によじ登って遊んだのが原体験だ。8歳の時にはインドアの大会にも出場。その後は世界ユース選手権を3連覇。身長は150cm台半ばと決して恵まれた体格ではないものの、雑誌「ニューヨーク」は彼女の美しいクライミングスタイルを「ウォールダンサー」と形容した。

「大会だと時間制限もあるし、力まかせで登る人もいるけれど、それは私のスタイルではないんです。登る姿が美しいと

言われるのは、すごく嬉しいな」

10代で最高のクライマーとも評される彼女は、結果だけでなく登る過程にもこだわる。ただ速く登れば良いというものではないらしい。

五輪では、高さ15mの壁を2人が同時に登り速さを競うスピード、高さ4m程度の壁を制限時間内にいくつ登れるかを競うボルダリング、制限時間内に高さ15m以上の壁のどの地点まで登れるかを競うリードの3種類の合計で順位を争う。

「ボルダリングとリードは、毎回課題が変わるから必要とされる動きも変えないといけない。頭もすごく使うけれど、そ

れが楽しいんです。だけど、スピードは考えるより先に体を動かさなきゃいけないでしょ。だから、実はあんまり好きじゃないな」

確かにシニアに戦いの場を移してから成績を見ると、ほかの2種目に比べてスピードの成績は芳しくない。8月に日本で行われた世界選手権でも振るわず、東京五輪出場の内定を得ることは叶わなかった。だがまだチャンスはある。

「東京五輪は大きな大会だから、やつぱりワクワクする」

母国の壁で軽やかに踊る白石阿島を、ぜひ見たい。 **S**

しらいし あしま／2001年生まれ。18歳。幼少期はフィギュアスケートもやっていたが、徐々にクライミングに傾倒。インドアの大会で目覚ましい成績を残しているだけでなく、自然の岩場でも上から2番目の難易度であるV15グレードを、14歳の時に女性で史上初めて完登した。現在はアメリカ代表として東京五輪を目指している。

